



入学試験問題

国語(A)

(配点二二〇点)

平成十六年二月二十五日 九時三〇分～一二時

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で二十一ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(第一面二箇所、第二面一箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。記入箇所を誤った解答は、その解答に限り無効とします。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。これらに違反した答案は、無効とします。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用に使ってもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙および問題冊子は、持ち帰ってはいけません。

受験番号						
------	--	--	--	--	--	--

上欄に受験番号を記入しなさい。

第四 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

かりに「写真になにが可能か」という問いを自らに発した時、私にはそれに対する答えというより、ほとんど肉体的な反応といったようなものが二通り生れてくる。

一つは、いま自分が生きつつあり、さまざまなかたちで敵対する世界に対して「写真には何もできない」という一種の無力感である。しかしその無力感の下からたちまち意識に上ってくるのは、私が写真によって捕捉^{ほそく}しえた世界のさまざまな意味であり、それを考えたときに生じてくる「写真に可能ななにものがある」という認識である。実は、われわれの日々は、こうした問いと二様の答えのくり返しであり、どちらか一方だけではありえないのだ。^アこのような事情はなにも写真に限ったことではない。表現芸術のすべてについていいうることなのである。

たとえば、今日、われわれの生きている世界の激しい動きと、その中から生れてきた鮮烈な変革の思想と、その挫折^{さげす}という起伏を前にして写真になにが可能かと考えた時には、われわれは無力感に陥らざるを得ない。政治と芸術を一元化しているわけではなく、われわれが生きていることのなかに両方ともかかわってくるから、このような無力感も当然なのである。しかし、この無力感の中で「写真にはなにもできない」といい切ったところでどうなるものか。しかしその無力感も、少なくとも写真にまつわるさまざまな既成の価値を破碎し、未知の世界の中に自分を位置づける上では有効である。いわば写真にかぶせられた擬制^イ——リアリズムもこのうちに入る——虚構をひとつひとはがしておのれの意識と肉体が露出するところまで下降する根源的な思考が欠落したところに、どのような透徹した精神のリアリズムもありえない。

だが写真がわれわれに衝撃を与える機会には、いまでも明らかに存在する。多くの人が記憶しているだろう一つの例をあげてみよ

う。われわれはベトナム戦争について多くのことを知識として知^つている。しかしAPのある報道写真家がつた「路上の処刑」という写真ほど、ベトナムの意味を理解させるものはない。それは南ベトナムの国警長官をしていたロアンという男が、捕えた解放軍の兵士を路上で射殺する場面をとった二枚の写真である。一人の男がもう一人の男にピストルを向け、次の瞬間にはイモ虫のように兵士がころがつている。この男の死は、二つのショットの不連続のあいだに消失してしまい、この死の消失には胸の悪くなるようなものがある。美^ウしさも悲しみもないゼロの世界がそこに現^ウわれている。この世界の現前は多くの示唆を含んでいる。

この醜悪さが、もはや言葉でも意識でも捉えられないわれわれの存在の深いところに衝撃を与えるのである。しかもこの写真家は戦争を告発する意図によつて撮つていたのではない。その写真、あるいは瞬間の写真が継起するあいだに消失した世界は、もはや彼の思想とか意識とかいわゆる主体を越えてしまつて、何ものかになつてしまつているのである。この写真はなにを記録したのであろうか。われわれは死に立ち会つたというより、死のゼロ化に立ち会つたのである。この痛みはなかなか消えない。

この問題をもう少し広げてみると、写真には、こうした世界の不気味さをとりだす能力がある、ということになる。たまたまそこに居あわせたからということもあるうし、また別の目的でとつた写真の場合も少なくない。写真が生れてから百数十年にわたつてとられ、残されてきた写真の群れをふりかえつてみると、このような無数の人々の無数の偶然によつて、全体としてたしかなものも、不気味なものも含めて人間の歴史の膨大な地質を構成しているようにみえる。

そう考えれば、改めて写真と、写真家の意味を問い直すことにつながつてくる。写真家は不要なのか。それとも写真家はジャーナリズムの写真ページを構成するプロフェッショナルなのか。

主体の意識を考えた時、写真は不便なものである。自分^エの内部に思想があつてそれを写真に表現するという俗流の考え方は、いつも写真によつて裏切られるだろう。だが一方言葉で、たとえばアラン・ロブ・グリエやミシェル・ビュトールらがいかに外的な世界を描写しようと、それは時間の中を動いている意識にすぎないのに比して、写真は無媒介に世界を目の前に現わすわけである。写真と言葉とは異質の系に属しているし、世界をつかむ方法が違つてい^る。今日の文明の変質をとらえて、それは活字文化から映像文化への移行だといわれてきたことにもいくらかの真実が含まれているわけである。読むよりも見る方が「わかりやすい」と

か説得的だとかいわれることは、その現前性、直接の機能の一面をすくいとっているだけである。

おそらく写真家は、あらゆる表現者のうちでもっとも不自由な人間かもしれない。心のうちなる世界をあらわそうとしても、うつるのは外にある対象である。だが、そのような世界とのずれた関係が、実は、私をひきつけるのだ。写真家は、世界が自己をこえていること、そこには不気味なものもあることをもっとも明確に見出した最初の人間であるかもしれない。世界とは、人間そのものではなく、人間の意識によって構成されるものでもない。世界は存在し、かつ人間も存在している。世界とは反人間的な、あるいは超人間的構造と人間という生^なまの具体性^なとが織りあげる全体化のなかにある。

（多木浩二『写真論集成』）

〔注〕 ○AP——アメリカの通信社。

○アラン・ロブ＝グリエ——Alain Robbe-Grillet（一九二二～） フランスの小説家。

○ミシェル・ブュトール——Michel Butor（一九二六～） フランスの小説家。

設問

- (一) 「このような事情」(傍線部ア)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (二) 「写真にかぶせられた擬制」(傍線部イ)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (三) 「美しさも悲しみもないゼロの世界がそこに現われている」(傍線部ウ)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (四) 「自分の内部に思想があつてそれを写真に表現するという俗流の考え方は、いつも写真によつて裏切られるだろう」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、わかりやすく説明せよ。